

氏名	オオ ヤ モト コ 大 矢 素 子
学位の種類	博士（音楽学）
学位記番号	博 音 第 202 号
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 26 日
学位論文等題目	〈論文〉オンド・マルトノの開発史とその作品 ーコンテクストから読み解く電子楽器ー

総合審査委員

(主査)	東京芸術大学	准教授	(音楽学部)	福 中 冬 子
(副査)	〃	教 授	(〃)	西 岡 龍 彦
	〃	〃	(〃)	片 山 千 佳 子
	〃	〃	(〃)	大 角 欣 矢

(論文内容の要旨)

本論は、「オンド・マルトノの開発史とその作品——コンテクストから読み解く電子楽器」と題し、オンド・マルトノが20世紀初頭に開発された過程を、時代背景と関連して考察している。

なぜ、オンド・マルトノに注目するのか。この楽器には、1928に考案されて以来現在に至るまで、1000曲を超える作品群が存在している。さらに、同時代に発案された電子楽器のなかで、唯一仏国立の音楽院で教授が続けられている。それにもかかわらず、この楽器に関する研究は、レパートリー分析の点からも、歴史的研究の点からも、十分に行われているとは言い難い。本論では、オンドの先行研究に不足している点を考慮に入れながら、以下に挙げる4つの論点から考察を行った。

【1】20世紀の初頭の「科学」に対するイメージを負った発明品として、楽器をとりまく歴史的・音楽的コンテクストを見る。【2】その際、文明立国としての立場を喧伝するための科学至上主義や、神秘主義的思想など、多種の潮流が混在した1920年代のパリの歴史的事情をふまえる。【3】楽器の開発に対し国家的援助が行われ、最終的に国立の高等音楽院の科として採択され、現在も教授されているという事実の意味を問う。【4】最後に、同時代に書かれたレパートリーに加え、マルトノの後に、パリ国立高等音楽院のオンド科教授となったロリオが主導となり、拡充したレパートリーを分析することにより、オンド・マルトノの楽器としての展開を追う。

以上の論点に基づき、制作者マルトノによる活動を、思想的戦略と実践的戦略という二方向から概観し、オンド・マルトノの受容史の再構成を試みた。その結果、本論第1章では以下のことが明らかとなった。

20世紀初頭において、新楽器は先端科学をエンターテインメントとして実感するためのツールでもあった。そうした状況のなかで、マルトノは、自らの楽器を通し、万人が新たな表現を手にする可能性を提示し、リラクゼーションを取り入れた音楽教育得メソッドを通して、労せずより深い音楽表現に実現する可能性を描き出した。

また、本論第2章第1節から4節では、マルトノの楽器製作に対し、国家の評価がどのように行われたのかを考察した。その結果、マルトノは、仏国の文化政策のなかに自らの楽器製作を位置づけるべく、第2章各節で概観した実践的戦略を、第1章で論じた思想的戦略によって補完することにより、説得性を高めていた。

第3章から第5章では、より後代における事象を考慮に入れるべく、オンドを用いた作品の分析と、オンドの模造楽器が持つ意味の再考を行った。その結果、第3章で分析したメシアンとジョリヴェによ

るオンド作品において、オンドは、「抽象化」の書法によって（本論第3章参照）、新たな表現を実現するための素材として機能していることが明らかになった。また、第4章で行った、ミュライユと丹波明による作品の分析では、例えば、倍音を拡大視（聴）する書法によって、音と音のつなぎ目が融解するような音響現象が生起していることが明らかになった。さらに、こうした拡大視（聴）の書法には、「マッハの時間感覚」（本論第4章参照）が共通して見出される。このように、本論第3章と第4章での作品分析から、電子的音響素材としてのオンドの用法が、時代的コンテキストの影響を受けて変遷していることが明らかになった。

本論第5章においては、楽器製作の観点からも受容史を再考するために、1940年代と2000年代に登場した4種の模造楽器と、オンド・マルトノとの比較を行った。その結果、これらの模倣品には、すでに確立された規範とは異なる、独自の演奏の美学が適用されていることが明らかになった。また、電子楽器の歴史においては、楽器間でのイメージの共有と再構築が、他の楽器の歴史にはない規模で行われていることを指摘した。

以上の考察の過程から、オンド・マルトノは、同時代に開発された他の電子楽器と同様、20世紀初頭における先端科学のポジティブな表象として考案され、文明立国としての国家の姿を表象する媒体でもあったことが明らかになった。さらに、その受容の過程においては、マルトノと、その後継のロリオによる思想的・実践的戦略が、楽器に対する認知を高める要因として作用していた。そのなかで、ロリオは、レパートリーを拡充することによって、楽器の新たな語彙を記録し、他の楽器にひけをとらない歴史を持つ電子楽器としての立場を喧伝した。

これら楽器製作者による戦略と、楽器が受容される過程での種々の反応が交錯するなかで、オンド・マルトノは楽器として認知され、その模倣楽器は、オリジナルの楽器が参照されるべき豊かな含意を持つ存在となったことを証明している。こうしたことから、ひとつの楽器が成立する過程は、その楽器に対する種々のイメージの交換の堆積から生起すると結論づけた。

（総合審査結果の要旨）

本論文は、フランスの電子楽器、オンド・マルトノの開発と受容の歴史とその背後に見える様々な思想を、幅広い歴史的・美学的文脈を通して検証する試みである。オンドを巡る研究は、作曲家・作品研究として、あるいはモーリス・マルトノの伝記的研究としては存在するものの、オンドがどのような時代的背景の下、どのような戦略を伴って開発・伝播されたのか、そしてそれは後の受容とどのような齟齬を生み出しているのか、といった問いを巡る批判的研究はこれまでになく、その意味で本論文は20世紀音楽研究に大きな貢献を果たしていると言える。また、演奏者としてパリ音楽院のオンド・マルトノ科で学んだ筆者ならではの、詳細な論考も数多く含まれていることも、高く評価されるべきである。

第1章では、マルトノが開発したオンドがどのような「啓蒙的」思想の結晶であったのか、またその啓蒙的思想が同時代の科学に対する憧憬と合致した、その事実の背後に見えるマルトノの戦略を論じている。楽器やマルトノに直接的関連性のあるものだけでなく、当時の科学雑誌なども検証し、結果としてオンドが1920年代のフランスで生まれることになったその「必然性」を巡る興味深い論述が展開している。続く第2章も、単なる「音を出す電子的機器」以上の思想のもと開発されたオンドの伝播が、マルトノの緻密な実践的戦略に基づくものであったという仮説が論じられ、その後の受容における元来の意図との齟齬をめぐる検証と併せ、オンド史研究に新たな視点を与えている。

続く第3、4章では、オンド普及初期の作品群と、70年代の作品群の分析が行われている。ここでも、オンドのメカニズムを熟知した筆者ならではの興味深い論考が見られる。他方、分析内容そのものには問題はないものの、分析の方法に関する深い検証の欠如や、同時代の創作美学との関連を巡る文脈的論考のバイパスにより、章自体の必然性がいまひとつ明白になっておらず、非常に残念である。続く第5

章も、「模造楽器」の検証を通じてオンドのどのような側面を明らかにしたいのか、その戦略的思考が不十分なため、その役割が明確に伝わってこない。

上記のような問題点も散見されるが、既に述べたように、本論文はオンドを巡る新たな考察点や知見を提供し、それらを緻密な論考で組み立てている。よって、博士の学位を授与するに十分に値すると判断される。